

杲

本文

私はとある飲料メーカーの商品開発部に所属する会社員だ。現在トクホを取ることを目標としたダイエット飲料の開発に携わっている。そんな私に、課長が言った。

「君、試作品を試飲する役をやらないか？」

それには私はしかめっつらで答えた。

「やらないということはありませんが、トクホを取れるような飲み物ってどれも苦かったりまずかったり——」

これには課長が私よりひどいしかめっつらをしたので、私は慌てて話題を変えた。

「と、ところで、今回の商品のコンセプトはどういう……？」

「ああ、コンセプト、コンセプトはだなァ……。」

この課長には話術の心得というものがないのか？きっと今までにいろんな社員に、試飲を遠回しに拒まれたことであろう。伝えたくても伝えられない自分に課長の腹が立ってきていたので、私は渋々その件を受け入れた。

いかにも試飲、という形であった。あの後私は課長に、サインペンで『実験台』と汚い字で書かれた小さなペットボトルを渡された。そもそも実験台とは？と思いつつ私は課長の説明を聞いた。寝る前に飲む、のだそうだ。私は再度、コンセプトを聞いておいた。どうやら、『早寝早起きの習慣を否応無しに身につけさせ、否応無しに体力を消耗させる』だそうだ。もっとコンパクトに出来なかったのだろうか。いよいよ我社の末路が気になった。

寝巻に着替え、私は最後に『実験台』を飲んで布団に入った。苦さ、というものはなかった。無味無臭、とでもいえるだろうか。そんなことを考えている間に私は眠りに落ちた。

いつもの起きる時間、七時。目覚まし時計がうるさかったので、私はそれを止めようとした。しかし、手が思うように速く動かなかった。体が重かった。異常に硬かった。頭の横に置いておいた目覚ましに手が触れるまでに十秒かかった。立ち上がるまでに三十秒かかった。これだけでも十分エネルギーを消費した。疲れた！汗まみれになって私は叫んだ。

「ぬァんだァくォれわァ！（何だこれは！）」

この言葉を発するのに十秒かかった。これでは恥ずかしくて街中で喋れない。いや、それどころではないと思い私は急いで支度を始めた。このペースでは遅刻だ。

歩き方はまるでロボットダンスをスローモーションで再生しているかのようだった。町の人が私を嘲笑の眼差しで見ている。登校中の学生はケータイのカメラで私を撮ってきた。サングラスをかければパフォーマーと思ってくれただろうか。私は課長を恨んだ。

やはり遅刻した。社内あの冷たい視線は忘れられない。まるで、

「アイツ、遅刻してるのにふざけていやがる。」

「アイツはクビだな。」

とでも言いたげな視線だった。

それに反して、私の持ち場にいる社員の私を見る視線は、まるで凱旋した勇者を見るようなものであった。すぐさま私のもとに課長が駆け付けた。

「よく頑張った！ほれ、これを飲め！」

飲め、というより三人掛かりで私の遅く開く口をこじ開けてそれを流し込む、という形になった。それを飲んだ瞬間、私の動きは通常に戻った。拍手喝采。課長は叫んだ。

「予想通りだ！」

予想通りだと！？

「これを飲むと、早起しなれば遅刻。エネルギーを消費するから痩せる。疲れたから帰宅後バタンキューだ！大成功！」

いよいよこの会社を辞めなくなった。

解説

あの飲み物には、脳に勘違いをさせて一時的に体の筋肉に力を入りにくくする効果がある。課長が最後に飲ませた物には、舌の神経を伝って脳を刺激する効果がある。これによって、脳は正常な動きを再開できるのだ。無論、売れなかった。

読んで下さったみなさまへ

この度は、私が書いた小説を読んでいただき、本当にありがとうございます!!!

早速ですが、みなさまにお願いがあります。よろしければ、本作品へのダメだし(?)を頂戴したいのです。というのは、私もまだ中学生なのでありまして、まだ文章力が身につけていないのです。こうやってあとがきを書いている、そのことばかりが気になります(苦笑)。

という次第です。お時間にゆとりがある方、どうかお願いします。

筆者

呆

<http://p.booklog.jp/book/72706>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72706>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72706>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ